

記憶の中の日本の家

— 公益的ユニバーサルデザインと知的家具 —

菅原 孝則

1 ユニバーサルデザインと住宅

日本のすまい

ユニバーサルデザインとは

商品住宅のバリアフリー

3 日本文化と公益的ユニバーサルデザイン

家の境界

記憶としての家

公益的ユニバーサルデザイン

2 知的家具

箱の発生

内部をもつ箱

収納家具の変遷

1 ユニバーサルデザインと 住宅

日本のすまい

日本のすまいは、襖に仕切られた二室、外と内の間にある縁側という空間の曖昧性を特徴とし、障子越しの光に情緒を感じ、自然や風土とのつながりや、家族や人とのつながりから様々な文化を生み出してきた。

日本座敷の軒庇は、深いものを良しとし、一メートル前後から深いもので二〜三メートルに達するものまである。これは、外と内とを分ける軒庇は、日本住宅の曖昧空間を作り出すとともに室内外のことを考慮してのことである。

日本には四季というすばらしい気候があり、それぞれに咲く美しい花、葉緑の植物、あるいは、雪というものが、庭園を季節ごとに彩り、それを楽しんでいた。

居室をななるべく庭に近づけて、庭をいつも眺められるよう縁側をつけ、雨が入り込むを防ぐために軒庇を深

いものとしてきた。また室内側は、軒庇の深さに応じ薄暗くなり、そのために襖には、白っぽいもので光を拡散し、奥の間には、金箔といった輝く装飾をしてきた。この部屋の暗さは、日本の文化をつくりだしてきた美の特徴でもあり、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」の一節に次のようにある。『日本人として暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあなつたのものである。が、美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに、美を発見し、美の目に添うように陰翳を利用するに至った。事実日本座敷の美は全く陰翳の濃淡によって生まれているので、それ以外になにもない。』さらに、『われわれは、この力のない、わびしい、果敢でない光線が、しんみりと落ちついて、座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土蔵とか、厨とか、廊下のようなところへ塗るには照りをつけるが、座敷の壁は殆んど砂壁で、めったに光らせない。もし光らせたなら、その乏しい光線の、柔らかい弱い味が消える。われらは何処までも、見るか

らにおぼつかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取りついても辛くも余命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ我等にとっては、この壁の上の明るさ、或いはほのぐらさが何物の装飾にも優るものであり、しみじみと見飽きがしないのである』(「陰翳礼讃」中央公論)

軒庇のある縁側は、日本住宅の特徴の一つであるが、今の住宅の客間という日本座敷は、日本の文化美からは、遠いものとして映ってしまう。

洋間が中心の商品住宅の和室は、その多くは客間としての機能をもち、かつての日本の文化的座敷の意味合いとは、かけ離れている。

最近、バリアフリー住宅という言葉をよく聞く。本来、バリアフリーという語は、障害者のバリアを補うことを目的としたはずだが、近年の高齢化社会から、高齢者にとって使いやすい住宅をバリアフリーと呼んでいる。

具体的には、敷居の段差をなくし、通路開口部が広く、そして、手すりが多く使ってある住宅である。敷居の段差がなく、歩きやすいことは、もちろん、誰にとっても良いことだか、「敷居の高い家」、「敷居を踏んではいけ

ない」といった、日本での文化的慣習や仕来りが消えていきそうである。

高齢者にとって使いやすい住宅は、段差や手すりの問題だけではなく、もっと肝心なことを見逃していそうである。日本の文化的美意識や感覚は、高齢者の記憶の中に数々あるからである。

ユニバーサルデザインとは

バリアフリー住宅から、障害者や高齢者だけではなく、もっと範囲を広げて、誰もが使いやすい住宅をユニバーサルデザインの住宅と呼びつつある。

ユニバーサルデザインという語も、商品ビジネスにおいて流行してきそうである。

一九八〇年代後半、アメリカのロナルド・メイヌ氏が七つの原則をもって提唱してきたものである。

(1) 公平に使えるデザイン
誰に対しても不公平や差別のないデザイン。

(2) 使用上の柔軟な対応のできるデザイン
個人の能力に応じたり、利用方法に選択肢がある。

(3) 簡単に直感的に使えるデザイン

利用者が、経験や知識がなくても理解が容易である。

(4) 認識しやすい情報が提供されているデザイン

利用者に理解しやすく、わかりやすい情報提供と情報表示がされている。

(5) 誤った操作をしても問題のない、また誤操作を起こさないデザイン

誤操作をしても危険の発生しない機構、通常の使用では誤操作しにくいデザイン。

(6) 身体的負担の少ないデザイン

身体的な負担がなく、労力を要さず、無理のない操作しやすいデザイン。

(7) アプローチしやすく、使用しやすいスペースとサイズが確保されたデザイン

様々な移動方法や姿勢にも対応できる機能設置やスペースの確保されたデザイン。

この七つの原則は、あくまで概念であり、数値的な基準はない。また、アメリカでの物作りの基準や建築法規も日本のとは違い、日本に合った独自のユニバーサルデ

ザインを展開していくことが公益につながると考えられる。

概念としてのユニバーサルデザインは、幼児から高齢者まで、使いやすいものになるが、果して可能だろうか。また、日本文化を作ってきた住居の仕来り、家具調度品においての使用において、誰もが使いやすいものとは、どういうことだろうか。

この概念をそれぞれの国や民族、社会において読み直し、公益としてのユニバーサルデザインに繋ぐことはできないであろうか。

商品住宅のバリアフリー

ロナルド・メイス氏によって提唱されたユニバーサルデザインの背景には、バリアフリーと言われる障害者のバリアを補うという根底がある。ロナルド・メイス氏は、車イス使用者であることと、ユニバーサルデザインの思想がアメリカで普及した時期は、アメリカ障害者法（ADA法）の時期と重なっているからである。

日本でも、バリアフリーの製品や住宅は、すばらしい

ことであり、今後もさらに商品展開されていくこと
でしょう。しかしながら、世界市場や日本市場ともに、環
境や健康ということが商品としての差異記号として流通
していることから、このバリアフリーと言う語も、住宅
の商品としての単なる消費記号として流通しているの
ではないだろうか。全てではないにせよ、バリアフリー住
宅として売られている商品住宅には、段差がなく、手す
りがつき、開口幅が広いというだけで、この言葉を使用
しているところもある。

九五年に建設省より「長寿社会対応住宅設計指針」が
出され、まず、ユニットバスの段差と開口幅の狭さの解
消が、長寿社会対応住宅で行われた。長寿社会住宅とは、
住宅金融公庫を利用して建てられる方が、段差や開口部
の狭さを解消すると融資金額が増えるというもので、
数々の基準を満たしていないといけない。

バリアフリーという言葉と、長寿社会対応住宅設計指
針、そして、現実の高齢化社会ということが重なり、バ
リアフリー住宅は、ビジネス用語としてひとり歩きして
いる。

さらには、このバリアフリーを包括するユニバーサルデ
ザインという語も、建築ビジネスにおいて、勝手に歩き
出しそうである。

ユニバーサルデザイン、誰もが使いやすくデザインさ
れたものは、本来、公益として歩んでいかななくてはなら
ないはずである。

2 知的家具

箱の発生

住宅の部屋は、主に、台所、食堂、居間、寝室、書斎
等、数々の名前がある。最近では、ワーキングルーム、
ストックルーム、あるいは、玄関リビングといった室名
をつけて売られている住宅もある。

私達は、初めての住宅の中を見た時に、各自の記憶の
部屋と無意識のうちに照らし合わせ、記憶の中の様々な
イメージタイプから想像している。その記憶の部屋とは
何なのか、そしてまた、その記憶を作り出してきたもの

は何なのか。室内調度品としての家具を見つめながら、文化的織目をほぐしながらみていくことにする。

○差異記号としての室内

日本の室内および、家具の合理化は、大正から昭和初期に始まる。製品は工業生産され、室内は機能的に合理化されていく。それ以前の明治期においては、西洋諸国の真似にすぎず、洋風化の時代とも言われている。

第一次世界大戦後の資本主義の発展に伴い、中産階級の層が増えていく。この中産階級の目指す住宅は、「文化住宅」であった。和洋折衷の住宅で玄關脇に洋風応接間のついたものが多くあった。この玄關脇だけの洋間は、客室として使われていた。現在の商品住宅のパンフレットを見るとほとんどが洋間であり、一室程度の和室の客間がプランニングされている。このことは、当時と逆のことが起こっていて、注目すべき事実である。

大正八年頃、「生活改善同盟」が文部省の指導下におかれ、今までの座式生活から、椅子式に改めることをスローガンの一つとしていた。生活の中に椅子を取り入れ

ることを文化的とし、昭和三年には、「文化セット」という、小さな円形のテーブルと椅子も、工業製品として発表され、ヒット商品となっている。

当時の「文化」という語は、商品としての文化であり、本来の文化とはかけ離れている。「文化」という差異記号のついた住宅であり、工業化の産物である。

近代化は、製品を工業化し、広告を創り出し、そして製品に物の意味とは別の購買意欲をかもしだす差異記号をつけて売り出している。また、民族的背景でもその記号価値は違い、例えばイタリア製の家具は、日本人とイタリア人ではその価値が違う。

私達は、ある室内を見た時に、家具の配置やデザインを見ただけで、それぞれの記憶の中のタイプと結びつけ、あるイメージをもつことになる。そのイメージは、流行に左右され、かつての商品としての「文化」ではなく、現在の和室の客間には、本来の文化が残っているのだろうか。

○家具の類型

家具の意味を形成しているものは、道具としての機能と、時代や文化や民族によって違う差異記号の二つの側面がある。

西欧のロココの椅子であれ、古代エジプトの椅子であれ、その当時、それらの椅子がどういう意味をもっていたかということは関係なく、座るという機能以外に、現代では当時と全く異なったコンテキストの中に位置づけられてしまう。家具の記号性が機能している事実である。

現代社会において、家具も他の物と同様に、モノの本質的な差異によるのではなく、価格によって均質化された商品としての差異にはかならない。商品としての差異とは同じ物であっても、デパートで買ったものと、スーパーで買ったものとは価値が違ったり、カタログへの載り方で価値が違ったり、あるいは、ディスプレイの仕方でもその価値は大きく違ってくるということである。これが現代における物の差異記号の一つの特性であり、この差異記号の分析は、ある時代の民族や文化や社会の在り様とか、人間の意識の変遷をさぐる手助けとなる。そこで、

家具の道具としての発生から考え直してみることにする。

家具が文明のどの時代に発生したかはよく知られていないが、我々は現在でも山に行けば木株に座ったり、あるいは木株をテーブル代わりに使用している。逆に、普段の生活でも椅子を台のようにして使うことがあったり、また、テーブルに腰をおろす時もある。要するに人間は、所作の中で腰をおろしたり、物を置いたりする水平な台のようなものを必然的に求めている。古代には、自然木を削り出したスツールや何かの骨を使った椅子を作った例もある。何か自然物を転用させて椅子やテーブルという道具を、人間の様々な所作の中で身体機能の延長上で発生させていたのである。

これらの人間の身体の延長として発生した、椅子やテーブル、あるいはベッドというものを、全く抽象的な図式に置き換えると、椅子は腰を支える面をもつ台であり、テーブルはある高さをもつ水平な面であり、ベッドは体を支える水平な台のようなものである。つまりは、床から持ち上げられた水平面Ⅱ台というのがそれらの原型としてみえてくるのである。

しかし、収納家具は、人間の身体機能の延長線上には見えてこない。まず、物が生まれなければならない。そして、それらをしまったりする箱として生まれた。内部をもつ箱として収納家具は存在しているのである。簡単に言ってしまったが、物があればそこに即座に収納家具が誕生するわけではない。ある概念的な脈絡のもとに、物を入れる空間の必要性が生じ、物がそのような空間を具体化していったのではないか、という推測にここできとどめておく。

家具は台と箱という類型に分けることができる。そして、台としての家具は、人間の様々な所作といった身体機能の延長上にかかわるものであり、そこには自然物の転用という人間の知性が働いたものである。また箱は、内部をもつものであり、その内部には、物の整理とか分類といった人間の知的操作ぬきには語れないものである。ここでは、人間の知的な部分が、本来重要視されなければならないにもかかわらず、軽視されがちな収納家具を主にして、知的な家具を分析していく。

○「箱」の発生要因

家具の歴史を振り返ると、椅子とかテーブルといった人間の身体機能の延長線にある「台」は、古代まで遡ることができるが、「箱」が家具化されるのは、中世の末期であり、さらに「引出し」というものが定着するのは近世になってからである。箱は人間の知的な操作によって発生したと前に述べたが、だからといって、中世までの人間の知能の発達が遅れていたということではない。

古代における台のような家具は、ほとんど支配階級だけのものであり、庶民の生活には家具というものがなかった。支配階級が使っていたということは、決して木株のような原始的な椅子ではなく、形や装飾にしてもとても高度なものであった。エジプトでは椅子は權威を象徴する王座であり、そして、移動を余儀なくされた生活のために、折りたたみ椅子というものを発達させていった。当然、仮説的な住居の中に生活していたわけである。外部に対しての「室内(内部)」という意識が、まだなかったと考えられる。また、物の数の極少ということも考えられる。

そして、椅子の歴史を考えてみても、かつて、エジプトの神官とつながりのあった初期のキリスト教修道士を通して、修道院の中に細々と継承されてきた系譜が、長い年月の後、中世になり、もう一度見直されてくるのである。

つまり、中世から、再び家具の歴史が始まるようなもので、そして、ようやく恒久的な構造をもった建築物が生活の場となり、外部に対しての「室内」という意識が生まれ、また物の数も増加し、室内での収納という意識が芽生えてくるのである。ここで少し断っておくが、中世の末期になり「箱」が家具化されたということで、物をしまったりということがなかったわけではない。例えば、死者をミイラにして埋蔵したり、食料を保管したりということはあったわけである。

無限に広がる外界から、建築という構造物により、内部（室内）が生まれた。それと同じように、物がまずあって、それをしまいう空間を作ろうとし、箱が発生したと考えるよりも、物自身のもつ象徴性とか、呪術性といったものを外部に対しての内部に収めたいと考えたほうがよ

さそうである。というのは、建築の形をしたチェストとか、切妻の屋根の形をした箱とか、あるいはパンドラの箱とか、日本でも建築の形をした霊柩車が死者を外界に旅立たせたり、浦島太郎の玉手箱の話が生まれる要因が、そこにあると考えられるからである。

内部をもつ箱

箱というものを定義してみると、何か物をしまおうという原型的行為が見えてくる。その原型的行為を探っていくと、原始時代、いや人間が誕生した頃まで根が張っているであろう。例えば、土の中に食糧をしまいこんだり、土器といった、物をしまいう容器というものを生み出していくのである。犬もその点、土の中に骨を埋める知的な動物である。原型的行為として言い表される限りでは、「物をしまう」ことであつたとしても、人間が生きていく生の次元では、様々な意味がついてくる。食糧などを貯蔵したり、死者を埋蔵したり、一時的にしまったり、隠ぺいしたり、また陳列であつたり、遊びにすぎないしまい方もあつたりする。つまり、「物をしまう」という

原型的行為には、様々な意味がついてまわっているのである。

椅子やテーブルといった「台」としての家具は、人間の身体の延長線上にある原型的行為によって定義することができ、が、「箱」としての家具は、その原型的行為をみても、他の家具とはつきり違っているのである。つまり、箱という造形物は、始めから意味論的な知的な構造をもっているからである。さらには、「物をしまう」ということは、必然的に内部空間があり、それは外部から識別されうる空間である。箱というものを、その空間としてとらえると、内部と外部という相反する分節が同時に見えてくるのである。

○日常に見られる箱の呪術的世界

私の実家には、どこの家庭にもあった幅が一二〇センチ位の茶ダンスがある。小さい頃、その茶ダンスの一番小さな抽出しが、私の専用とすることが許されていた。その中には、グリコのおまけといったたぐいのたわいのない小さなおもちゃ等が、ごちゃごちゃ入っていた。ま

た、一番下にある大きな抽出しは、祖父専用のものであった。そこには今だに、何が入っていたのかと考えても不思議なものだらけである。錆びた釘やビスといった、どこからか集まってきた小さな金具の入った箱や、壊れた物の部品とか、祖父以外にはゴミに見えるようなものばかりと憶えている。私は、その自分の抽出しを毎日のように、中に何が入っているのか見たり、捜したり、また整理したりしていた。常に、その中にしまわれるものが変わるわけでもなく、ほとんどがいつも同じような物がしまわれているのに、同じことを繰り返すのである。祖父も同じである。それらの抽出しには、それを所有する人にとっては、物をしまふこと以上に、もつと違う何かがあるとしたか考えられない行為である。

抽出しは、箱の分節として考えることができるが、その抽出しの発生とか意味というものを探り出すには、空間（室内）の分節ということから始めなければいけないので、ここではとりあえず、抽出しも、小さな箱ということだけにとどめておく。

子供の行為は、様々なことを考え出すきっかけを与え

てくれたり、また、何か研究の対象としていろいろな角度から分析される。その一つとして、子供の頃、誰もが経験あると思うが、ガラクタの入った秘密の宝箱というものをつくったことがあるだろう。大人には、決して開けてほしくない箱である。これは、物をしまったり、隠したりする箱というよりも、その中から物以外の別の何かを捜そうとしている、子供にとつての宇宙空間があるのである。まるで、「ドラえもん」のポケットのように期待される箱なのである。

また、昔話の中にも、大きい箱と小さい箱の選択をせまられた時に、大きい箱には、ゴミとかおばけといった俗悪なものが入っており、小さい箱には、宝物が入っていたりという、人間の欲望を箱との関係の中で、題材にされた話が数多くある。そういう箱にまつわる呪術的な意味から、ハコという言葉を使った表現方法もいくつかある。とても大事に育てられた娘を「ハコ入り娘」とか、宴会等で使われるその人独自の芸を「おハコの芸」と言ったりするよう、ハコという言葉が、ある限られた世界やそれを使う人間や集団の中で、囲まれた空間でありなが

ら、ある独特の世界（宇宙）がその中にあるのである。また、ハコ入り娘が結婚してしまった時のように、そのハコという囲いが解かれると、その意味が消えていく性質をもっている。

つまり箱というものは、開けたり閉めたりできるものであるが、閉ざされていれはいるほど、呪術的空間が広がっているように思えるのである。

○契約としての箱

箱は、中にしまわれるものとの関係から、様々な機能をしていく。宝箱であったり、ゴミ箱であったり、棺であったりするのである。また箱は、それ自体のものとしても機能していき、時代や民族によって、ある箱自身の意味が形成されたりしていく。つまり、箱も他のものと同様に、時間や空間の中で様々な付与される記号性があり、箱それ自体も差異記号として消費されていくのである。

しかし、内部をもつ箱の呪術性を説明するためには、他のものとは違う特殊性があるはずである。その特殊性とは、箱を開けたり閉じたりできるものであり、それに

よって生じる人間と社会の関係や、中に入れられる物の呪縛性といったような事が、特有の意味を繰り広げていくのである。

子供が、自分の大切な物をしまっておく箱を、よく「秘密の箱」と言ったりする。それは、親であっても黙って開けることを許されない。仮に、親がその中味を知っていたとしても、知らないふりをしなければいけない。その子供が開けていいというまでは、誰も開けてはいけなないのである。つまりは、子供が大事な物を入れた時から、その箱の蓋は、一種の契約を意味としてもち、それが閉じられている時の方が、当然その秘密性は増していくのである。

箱の契約性は、箱に存在する呪術性を表わす最も端的な例である。箱というものが家具化される以前にも、神と人との契約を表わすものとして、箱があった。例えば、旧約の世界においても箱の象徴性が、後のキリスト教全体に、神殿と同様に神の箱という神聖なるイメージとして広がっていた。他の宗教にしても、神と人との契約として箱があり、それが閉じられている限り、その契約が

守られているのである。現在でも、「お守り袋」というのは、袋が閉ざされているからこそ、神との契約が守られるものである。これも箱ではないが、内部空間をもつ、閉ざされたものとして同じ意味をもっている。人間が神の箱をつくったことは、その象徴性によって、世の中の超越性とか、呪術性といったものを手元に引き寄せ、それによって、集団が生きていくために行動体系を組織化し、そして秩序ある生を可能にしているのである。浦島太郎は、この契約を破ったために老人と化してしまったのである。閉じられた箱は、ある種の契約がそこにあるのだか、それとは逆に、人間の心理は、閉じられた別の世界をのぞきたくなるのである。

こういう人間存在の矛盾については、かなり哲学的追及が必要と思えるので、ここでは、そういった矛盾があるからこそ、伝説といった話の中では、「こうしたことをしてはいけませんよ」といった一方的な形式をとっているのだということにとどめておく。また、神の箱というものも、人間存在の矛盾があるからこそ、逆に必要だとも言えるであろう。人間と神との契約もまた、一方的

な形式である。

ギリシャ神話の「パンドラの箱」も、浦島太郎の玉手箱と同様であり、そしてさらには、箱というものが、内部と外部という相反する分節が成立しているように、建築の内部空間を表現する意味としても使われている。

さらには、浦島伝説と同様に伝説の例をあげれば、「ツルの恩返し」というのがある。ツルが化した女性が、自分の部屋を見てはいけないという話である。自分の部屋に対してそれ以外の部屋という内部、外部という関係があり、閉じられた部屋（空間）が、箱のもつ契約性と同じ意味をもっているのである。

内部をもつものとして、家具という箱をみてきたが、室内という内部をもつ住宅建築もまた、機能以外に内なる呪術的空間をもつていそうだ。

椅子という家具の始原的なものは、自然木を削り出したように、家具化した箱の始原的なものは、椅子という造形物を生み出した時と同様に、造形イメージをもつていたと考えることができる。しかし、椅子という道具とは違った特殊性が箱にはあるために、その形態は、単な

る道具としての機能を越えている。

箱が家具化されだした中世ヨーロッパに、丸太からオノだけで加工した様な構成からなる箱のような収納家具や、長持ちがあるが、それらの胴体には、何本もの鉄タガと何個かの錠により、堅く内部を閉ざそうとしている。単なる収納の目的以上に、緊縛や封鎖性を感じられるのである。現代になってもなお、西欧の収納家具には、その扉に取手がつくのではなく、鍵も取手として機能させ、鍵で開け締めするのが数多くあるのもうなずけるであろう。また日本の箆笥にも、何故か必要以上と思えるほど、箆笥金具がついているのも、箱のもつ呪術性によるのではないだろうか。

○建築の比喩

中世の箱型家具は、建築の形を模倣したものが多くある。頂部が切妻の屋根の形をしたものや、ペディメントを乗せたチェスト、あるいは、ロマネスク建築の半円形のアーチを連続して彫ったもの、古典建築のオーダーを取り入れたり、またその柱頭のみを用いたものといった

具合に、実に多くのものがある。

建築は、外部、内部という分節を与える最大の人工物として、家具よりも先に派生する。また建築は、外部に對して内部をもつものであるが、そこに住まう人間の、室内行為にかかわる環境である。つまり、人間は、生きていく環境を外部と内部に分節していき、その図式は、世界とか宇宙といった、無限に拡がる空間から建築(家)へ、そして箱へとということになる。これは人間の目に見えぬ拡がりとか、あるいは、物理的にはかたづけられない超越した空間に対する恐怖から逃れるための知的な部分の一つの現れであろう。そして、建築も世界に対する比喩とか、あるいは、象徴的意味をもっていた。だからこそ神殿等が、神のいる天に近い丘の上に建てられたり、また、建築自体もまぎれもない小宇宙としての意味を形成する造形物となっている。

古典建築の価値観も、例えば、十六世紀の建築家「アンドレア・パツラーディオ」が、まず古典建築の研究から始めたように、根強いものがあつた。十八世紀のキャピネットメーカー「トーマス・チッペンデル」にして

も、古典建築の研究を重要視し、そのカタログは、オーダーについての図と説明から始まっているほどに、建築の裝飾が家具にまで及んでいる。

また、中世の室内空間は、一室空間(室がまだ細分化されていない)であるためにも、内部をもつ箱型の家具は、家のミニチュアとして作ることが象徴的であることを示し、そして、世界から建築を経て、さらに内密な空間に至る階層を作りあげていたのである。

建築の比喩として、最初に発生したのは棺であり、内部をもつ箱という意味では、最もよく理解できるであろう。死者を別の世界(家)へ閉じ込めてしまふのである。

収納家具の変遷

○日本の近世

日本の家具の変遷を見直すと、大きく二つに分けることができ、その分岐点となつたのは、西洋からの生活体系の導入である。幕末から明治初期にかけての、「座式生活」から「椅子式生活」への変化である。収納家具についても全く同様に、今までの箆笥や行李等の箱から、

洋服をしまわうべく洋服箆笥の出現である。それと同時に、一般大衆への家具というものの普及が始まるのである。

箆笥が現れたのは、十七世紀末（江戸時代の始め頃）として知られているが、それ以前は、一部の上流階級では厨子や棚類の家具も使っていたが、一般には櫃だけであつた。

収納家具の原型である箱の変遷をたどっていくと、石棺から籠（縄文早期）といった具合に、知能の発達した人間の歴史をたどっていかなければならないので、西洋家具の導入される以前の様々な箱は断片的にながめてみることにする。

近世になって、収納家具が一般大衆に普及し始めた。

それまでは、上からの一方的な禁止と、富の公家と武士の独占、そして流通経路のなさ、といったことから収納家具は、貴族階級のものだけであつた。例えば、江戸時代、徳川幕府は、百姓、町人に対して、簡素化する禁令を実に多く命じていた。やがて、幕府の衰退と共に、民衆も富を得ることができるようになり、生活の種々の層の追及に応じたいろいろの収納家具を持つようになって

いったのである。もちろん、それ以前でも、富裕町人や豪農という一部の人々はあつたが、富の分布は、政治的な歪形をしており、一般民衆に及ぶまでにはいつてなかつたのである。

こうした収納家具の中で、その中心は衣類収納具である。衣類収納具として、最も普及したのは、挟箱、葛籠、行李、そして、櫃、長持等である。

挟箱は、衣類に竹を挟んで持ち運んだ挟み竹から発達した箱で、箱の両端にある鉄の輪に棒を通して、かつくようになっていゝものである。

収納家具として、最も原始的な時代からあつたものは籠である。自然にあるつるや樹皮などを使った編物類は、縄文時代から日常生活に入っていたことが明らかになっている。籠は、衣類、雑物、書類、食物にまでに及ぶ物入れとして使われ、室町時代には葛籠が生まれ、江戸時代に入ると行李が出現する。共に、一般向けの衣類入れであるが、行李の方が、葛籠よりも簡便である。近代になつても行李は、衣類入れとして大いに使われ、家庭の必需品の一つとしてあげられた程である。また、相当な

僻地でも、嫁入り道具として行李だけは持って行つたらしい。もともと行李は、中国語で旅人の荷物という意味で、都会に出てくる学生や奉公人も、必ず行李だけは持つて行つたように、一般大衆と根強いつながりのある、移動のための家具（箱）の一つである。

櫃に足がついているもの（唐櫃）は、運搬のための泥よけであり、また、運搬するための運搬具としても機能していた。その後、長持が普及し始めるが、長持は、かぶせ蓋で収納がかなり意識され、櫃よりも大型になり、そして移動のための鉄の棒通しがついている。

嫁入りの時の「長持唄」もあるように、嫁入り道具の代表とも言えるであろう。さらには、移動性ということを考えて車長持というのがあるが、江戸の大火（一六五七年）以来、禁止された。

近世で一般大衆に広まった、日本の収納家具というものを垣間見てきたが、それらのほとんどに共通する点が二つある。一つは、「移動性」という要素を含んでいる点であり、もう一つは、蓋のついた横長の箱であるという点である。後者は、日本の生活の特徴である「座式生

活」のために、床に座って蓋を開けるといふ形態をしているのである。そして、この後者の要素に、移動の仕方や身分や地域、そして素材といった要素が、複合的に関わり合つて、様々な箱のような家具を生み出してきたのである。

さらには、蓋のついた箱という構造体系の家具と、違つた構造体系の中に位置するものがある。「箆筒」である。箆筒は、箱がさらに細分化された抽斗を所有する箱であり、その発生と普及が、最も遅れた家具である。もともと「箆筒」という意味は、中国では、肩でかつぐ荷物という由来があり、持ち運びできる箱をさしている。やはり、箆筒も「移動性」という要素が含まれている点では、他の収納家具と同じである。

では、何故、他の家具より普及が遅れて、江戸初期からこの箆筒が広まりだしたのであるのか。家具史の文献から、その答えを探してみると、おおむね次のように説明してある。まず、一般大衆は、しまわれる物の数が少なく、貴族に至っては、召使がいるので、櫃で充分間に合い、つまりは、自分で分類整理したりする物もなく、

その必要性がなかったということと、抽斗を作るための材料の入手と、生産コストの問題で、安価に作る事が不可能であったということである。確かに、抽斗は、それ以外の収納家具、櫃とか長持、あるいは、小箱を置く棚の類に比べて、物の出し入れに機能的であるばかりでなく、分類して整理しなければならない。人間の知的な部分が感じられるが、抽斗の普及が遅れた原因は、もつと奥深いところにあると思える。なぜなら、箱というものの発生原因は、しまわれるべき物があつて生まれたのではなく、もつと人間の生に関する、呪術的世界がそこに繰り返り広げられた点にあるように、箱の細分化された抽斗も、今までの収納方法が、単に合理的に機能されただけでなく、もつと深いところにあるからである。

日本の家具は、そのほとんどが「移動性」という要素が含まれており、そして、「座式生活」のために、上蓋式の横長の箱といった構造をもつていて、さらに、その中で最後に登場したのが、抽斗をもつ箱、つまりは箆筒であった、ということである。そして、この後の、日本での収納家具の在り様を述べる前に、西洋の収納家具の

変遷と、その導入された頃からの社会構造を少し述べておかなければならない。その理由としては、まず、西洋家具が日本に導入された頃には、一応完成された形であつたことと、また、その後（十九世紀末）の家具の意味を形成していき、その在り様が大きく変わるからである。つまりは、物の価値体系が、十九世紀末から、大きく変化するからである。

○消費社会とは

現在、我々の使用している家具は、そのほとんどが西洋家具である。その収納家具の変遷をかえりみる前に、見逃すことのできない、大きな留意点がある。それは、西洋家具が導入された頃と、物の価値体系が大きく変わる消費社会の成立が、ちょうど同じ頃、十九世紀末頃である点である。

産業革命以後、物が大量に生産されるようになり、これまでの「物質的消費」から、「記号的消費」への移行が、十九世紀から二十世紀にかけて起り、ここで、物の価値体系が大きく変化することになるのである。それまで

の物のもつ尊厳さとか、物による人間の生への充実、あるいは、物と人間との象徴的交換がくずれたからである。そして、二十世紀には、十九世紀までの物質的貧困を克服したが、新たな生に対する貧困が始まった、とも言えるのである。

二十世紀に入ると物の価値は、イコール商品の価値であり、その価値とは、物の本質的価値とは関係なく、商品構造の中から創り出される記号的価値であり、それは、満足されることがなく、常に増殖される一途にある。消費社会とは、物にある価値観とか意味が、それとは関係なく、常に生み出され（広告等による）、新しい意味が同じ物であっても、どんな人工的につくられ、増殖し、その記号的意味が消費されていくのである。

西洋の家具が、日本に導入された頃、それらの家具が意味していたことは、「舶来品」「上流階級」等といった、家具本来の意味とは関係ない、記号的意味だけであった。明治期の洋風化や近代化の「文化住宅」は、文化的生活という差異記号として広まったのである。

○西欧の中世

十世紀から十二世紀にかけて、貨幣経済の確率と共に、都市の成立と教会の組織が確立した。教会における家具は、エジプト以来の家具の歴史が継承されており、その当時の家具としては、特殊な位置にあった。王侯や貴族たちは、その生活が移動を余儀なくさせられていたので、移動するための家具（例えば、折りたたみ椅子等）がほとんどであり、やがては、「宮廷化」していく過程で、教会の家具をなぞっていきながら、通り越していくのである。

中世の室内は、まだ部屋の分節化が進んでおらず、一室空間であるために、家具は、仮説的なものとして使われていた。壁の一部のような棚や、壁に沿って置かれたチェスト、あるいは、食卓にいたっては、食事が終われば壁際にかたづけられた。チェストと言っても、天蓋のついただけの横長の箱であり、その機能は、ちょうどトランクと違ってよいものであった。これは、生活習慣の違いはあるけれども、日本で言う、行李とか、櫃といったものと同じ意味をもち、まさに、移動するための仮説

的な家具のような箱であった。

○西欧の中世紀末から十九世紀

トランクとしてのチェストは、上部の蓋を開け、中の物を取り出さなければいけなかった。日本では「座式生活」のために、こういう構造をした家具は今だにあるが、西欧での「立式生活（椅子式生活）」では、中腰になって上蓋を支え、物を取り出さなければならず、まだ、家具とは呼べるものではなかった。そして、家具化されるには、立式生活の所作に合うように、トランク的な横長の箱ではなく、縦型に直立し、固定化されなければならなかった。

それにはまず、室内での行動環境と箱に収納される物との同化、つまりは、一室空間から、空間の分節が始まらなければならぬのである。しまわれる物とその室内とが同化したとき、トランクとして機能した箱は、床に固定できるようになり、そして、立式生活の所作に合うように、縦型に直立し、前面開閉のついた家具として生まれ変わったのである。また、室内での所作とそれが置

かれる箱が一致したからこそ、キャビネットとか、カブボード等といった、様々な収納家具が生まれていったのである。そして、日本の十九世紀までの家具が、日本建築の性質の空間分節の曖昧さや、座式生活であるために横長の上蓋式が多く、しかも、移動的な要因を含んでいたのが、うなずけるであろう。襖で仮に仕切られた室内では、櫃は、常に移動せざるをえないのである。

一方、西欧では、横型の箱は消滅したのではなく、それなりに完成されるのである。イタリア初期ルネッサンス期に見られる、カッソーネと呼ばれる家具である。移動する要素を含んだ、婚礼家具として完成され、それは、工芸品とも思えるほど、装飾の施されたものであった。

○抽斗の発生

箱の発生が、外部に対して内部をもつものとして生まれ、そこには、世界から建築で囲まれた内部、すなわち家へ、そして、家から箱へという関係が成り立ったように、さらには、家から室へという分節がなされた時に、様々な収納家具が生まれた。そして、この序列に従えば、

室内がより細分化された時に、抽斗が発生したということになる。

箱は、開かれる内部の世界が全部広がるが、抽斗は、その家具の全部ではなく、常に一部分である。つまり、内部の世界がより複雑化していく、人間の知的な部分の表れでもある。

室内の細分化とは、日本で言えば、建築から調度品や衣服にまで及んだ、幕府の禁令が、次第にゆるんだことであり、また西欧では、室内での儀式的な振舞が人間としての快楽を求めていったことであり、つまりは、公的な室内が、より私的な空間へ分節されていった時に、抽斗は生まれた。

そこには、近代的な意識の始まりである、合理主義の発生があり、また他方には、内―外という分節に対する非合理が潜在しているのである。ただ、これまでで明らかになったのは、古代以来、生活の中で、家具を生み出した人間の知能は、抽斗を生むことで頂点に達し、十九世紀までの収納家具は、人間の生に対して密接な関係をもち、そして、収納家具は、人間の知性に対して、常に

刺激を与え、その知的家具の頂点には、抽斗があったということである。そして、本質的に知的家具であるはずの収納家具は、近代に入り、まったく新しい展開をむかえることになるのである。

○メディアとしての家具へ

十五世紀末の印刷術の発明以来、十六世紀には、家具の意匠図版が刷られたらしい（家具というよりは、むしろ、建築や室内装飾の版画であった）。十六世紀のパッラーディオの建築四書は、線による建築図面であるが、十七世紀に入ると室内装飾の図版は、立面図にも陰影をつけ、奥行を出し、施主といった、一般の人々にもわかりやすくなり、様々なレトリックによる図法を生み出していったのである。

産業革命以後、トーネット兄弟商会は曲げ木の家具を作り、カタログ化し、世界的な大ヒットをよんだ。曲げ木の家具は、部材を部品とし、工業製品にふさわしいシステム化も行っていった。

現在、我々は、家具を選んだり、経験したりするのは、

そのほとんどが広告と化した家具によるもので、実体験によることはほとんど少ない。つまり、カタログやインテリア雑誌等による家具のイメージや、その使われ方、生活の仕方から、自分自身の家具の経験が増していったような錯覚にとらわれていることが、無意識の内に行われているのである。

すでに、トーネット商会の頃から、家具を商業ベースにのせた、システムのにとらえることが始まり、このシステム化は、二十世紀の収納家具の在り様を、大きく変えることになるのである。商業的な、知的家具に変わっていくのである。

3 日本文化と

公益的ユニバーサルデザイン

家の境界

箱と物との関係は、箱の内部の呪術的性と深い関わりがあり、収納家具の中で、細かく分節された抽斗が登場

するのは、抽斗の私的性が影響してきた。そして、抽斗の私的性は、建築全体が一室空間から多室空間へ、より私的な空間分節と結びついている。そして、多室空間への分節は、生活様式の複合化に対応している。

住居も、箱の内と外との関係と同様に、外部と内部がある。しかし、日本の住宅の特徴の一つには、外と内の曖昧な縁側がある。このことは、日本の家という領域との関係がある。

日本の古い門構えの家の戸口に、護符が貼ってあるのを見かけたことがないだろうか。災厄を門から中に入れない呪物である。日本の家の境界は、住宅という建築物の壁ではなく、所有する土地が境界であり、だからこそ、りっぱな門構えの家も多くある。これとは逆にアメリカ映画でよくみるアメリカの一戸建ての家は、家の前面に芝が広がり、そこは、公的な性格をもっている。内と外との境界はドアであり、そして、そこには装飾的なデザインがしてある。

人間は、家を造りだすと同時に内と外という関係の中で生活している。未開社会であれ、行動範囲の領域とし

て、内と外はある。そして、内と外との領域の構成は、それぞれの民族の文化に固有な特徴がある。日本の場合は、所有する土地が領域であり、まずはそこで、内と外に分かれる。だからこそ、縁側という内と外の曖昧な領域としての文化が生まれた。

記憶としての家

箱は、人間の知的な故に生まれた。箱としての家具は、知的家具といえる。しかし、近代化による工業生産、商品という大きな波は、商品としての知的家具に変えてきた。

明治期の洋風化住宅、大正期から昭和にかけての文化住宅、そして、ダイニングセットとして登場した「文化セット」は、商品としての消費記号であり、現在も、消費される差異記号から逃れることはできない。これからさらに進む高齢化社会に対して、公益性のある家はどうすべきなのであろうか。

住宅は、そこに住まわれることによって「家」になる。

家は、多様な時間の経験をもの語り、先祖たちの痕跡で

あり、家そのものが記憶である。仮に、建て直した家でも、記憶は全て消えるものではない。祖父母の教えた仕来りがあり、過去の文化を知る情報も限りなくある。また、家は、空気の流れから自然の情報が織り込まれている。

家の記憶とは、現在を過去との関係で問い直すことを意味していないだろうか。

公益的ユニバーサルデザイン

誰もが使いやすくというユニバーサルデザインは、商品構造の中で、企業にとっては商売のキーワードの一つとなりつつある。かつて、玄關脇の洋風応接間を文化と呼んだように現在の和室としての客間からは、本来の日本文化が消えていこうとしている。

家の記憶を呼び起こし、現在を過去との関係で問い直すことは、まだ概念としてあるユニバーサルデザインを日本人にとって住みやすい公益的ユニバーサルデザインとなるのではないだろうか。

バリアフリー住宅は、和室の段差をなくしたが、二十

センチ位の段差をつけたらどうなるのであろうか。客間から座敷としての意味が強くなり、品位が上がらないだろうか。高齢者にとっても、低い椅子となるであろうし、子供が走り回って、危ないというのであれば注意し、マナーを教えることもできる。座敷に付きものの縁側が狭い日本の敷地によりつくることができないのであれば、座敷の窓の位置を近隣とのプライバシーのことも考え、天井面からのびる細長い窓としたらどうだろうか。もちろん方位や諸条件との関係もあるが、自然光の入り方一つで、非日常的な「ハレ」の空間もつくることができるのである。

箱の内と外の呪術的空間から、人間の知的な家具をとらえ直し、同様に家の内と外との境界を見つめてきた。現在、消費される差異記号の中にある私達は、概念としてのユニバーサルデザインを人間の身振りの機能だけではなく、日本の文化と照らし合わせ、日本のユニバーサルデザインを築く必要に迫られているのではないだろうか。

公益性は、機能としての生活だけではなく、家から学

ぶ記憶、文化から学ぶ仕来りも必要ではないだろうか。

○おわりに

港町、酒田は、約二五年前の大火により生まれ変わってしまった。

柳小路は、完全に消えてしまった。

中町を中心とした商業の構図も変わってしまった。

二一世紀に入り、エコロジーやゴミの再生がさげばれる中、日本の文化は消えつつあると感じている。

バリアフリーやユニバーサルデザインという語が、あまりにも商業主義の中で使われていることに疑問に思い、公益性を問いながら日本の文化を再生していきたいと考えている。